

漁業經濟 学会短信

№ 14
70.6

第十七回漁業經濟学会

大会開催される

第十七回大会は津市の国民宿舍「御殿場荘」で五月九日、十日の両日にわたり開かれた。大会は三重県在住の会員、清水、倉田、松本、浦城、和田の諸先生をはじめとする方々のなみなみならぬ御努力、周倒な準備と、県庁、三重県漁連、信漁連等の諸団体の協力を得て極めて盛会であり、参加人員も二日にわたり泊り込んだ者のみで五〇人を越し総人員は八〇人余であった。シンポジウム「現段階における漁業協同組合の性格」をめぐるの討論も激し、討論予定時間を大幅に超過し、途中で打ち切らざるを得ない状態であった。シンポジウム要旨は第十八巻一号の学会誌上、浦城氏がまとめて掲載の予定である。

× × × × × × × × × ×

大会日程は次の如くであった。
大会第一日・一般報告

1. 漁獲統計よりみた漁村の類型について
三重県立大学

松本 巖

2. 三重県におけるブリ定置網漁業の変遷——尾鷲市九鬼を中心として——
美里中学 和田 勉

3. 大村湾と志摩の真珠養殖業
関西学院大学 大島 襄二

4. 真珠養殖業の財務分析
——不況の打撃と経営財務との関連——
三重大学 浦城 晋一

5. 海女の作業の実態と健康管理について
海上労研 岩崎 繁野

6. レジャー産業と水産業の結合
淡水区水産研究所 西村 章作

7. 工業化と沿岸漁業
農林省千葉統計調査事務所

田中 光男

8. 「栽培漁業」の経済条件
南西水研 長谷川 彰

9. 消費地における水産物流通の問題点
——冷凍魚を中心として——

！ 冷凍魚を中心として！

全漁連 安保史人
10. 「地域独占」と漁業小生産の解体
東大農学部 広吉 勝治

大会第二日・シンポジウム

テーマ 現段階における漁業協同組合の性格

1. 漁業協同組合の性格——問題提起——

漁村文化協会 宮城 雄太郎

2. 漁業協同組合の現況と問題点
全漁連 秋山 博一

3. 三重県における漁協中心の鮮魚の流通について
三重県漁連 宮原 九一

○ 討論
○ 総会

× × × × × × × × × ×

次年度の大会については東京周辺（神奈川・静岡・千葉県）で開催の予定。テーマはなお未定であるが本年に引き続き、漁協の具体的分析を主としながら「漁協の性格」ととりあげてみてはという意見もあるが、まずはシンポジウムのテーマについて、御意見を事務局まで是非十月一杯にお寄せ願うことを事務局としては強く希望している。

（事務局）

エキスカーシヨンの報告

和田 勉

第十七回大会は去る五月九〜十一日、三重県で開かれ、そのうち九・一〇両日の研究発表およびシンポジウムの結果については、会誌に輯録されているが、第三日のエキスカーシヨンもまた捨て難いもので、ここに紹介することと致します。

五月十一日、朝八時、小雨の中、御殿場荘を出発。それより先、バス会社より電話あり、低気圧が発達し、波浪注意報が出ているので、船をとりやめた方がよいとのこと。コース変更を世話人一同で決定。

予定では、津―穴川―的矢(佐藤養蠟研究所)―安乗―波切―和具―賢島(国立真珠研究所)―鳥羽―スカイライン―津のコース(は舟行)を、

津―穴川―的矢―穴川―賢島―鳥羽―スカイライン―津と陸上コースに変更。

御殿場荘を出発、穴川に向う途中、車中で清水先生の伊勢音頭の紹介、浦城氏の伊

勢郷土の自慢話あり、穴川着。ここで穴川・的矢間は舟行可能のことがわかったので、その部分だけ再び水路に変更。

穴川より志摩勝浦巡航船にて的矢湾の一面ののり、養殖風景、真珠養殖風景をながめながら佐藤養蠟研究所前に着く。

白髪佐藤氏の出迎を受け、案内によって所内を見学、無菌カキの施設を見る。それは紫外線にて照射した海水を八時間ほどかけて無菌カキ(大腸菌のないカキ)をつくるとの事であった。ここで、珍味、カキの塩からを試食する。

見学後、いかだ荘で食事。食事の前約四〇分、佐藤氏の、海洋学から見た的矢湾というテーマの講話を聞く。佐藤氏の話はユ―モアを交えられ、的矢湾の構造が海水塊を自然的に循環させ、真珠養殖に最適で、ピンク玉の養殖場としてすぐれた構造であることや、真珠養殖創設期の見瀬辰平の話または養蠟研究所設立の動機、カキ出荷の問題など、豊富であった。

的矢一二時三〇分出発。穴川へ再び戻り、賢島へ向う。国立真珠研究所を見学。展示室で、真珠や真珠養殖の資料の説明をうけ、のち、特殊機械室で、真珠品質研究上で必

要な新鋭機械を知り、電子顕微鏡にて「真珠の顔」を拝見。

真珠研究所をあとにして、志摩マリナランドを見学。マリナランドでは、未来の海洋開発の姿や、見る者の立場で立てられた水族館を見る。魚は退色がはなはだしかったが、円形プール(中心部の広い空間に観客が入って観る)では、多数のブリが急速度で群游するので、目をまわす者も出るほど壮観であった。

賢島で数名の帰る人を送り、車はスカイラインへ向う。鳥羽の港を窓から眺めスカイラインへ登る。雨もやんで車窓から眼下に伊勢志摩の海が一望にのぞめた。頂上に達すると霧がかかって来、そのため展望台には登らず、すぐ下山。

下山し、「赤福」茶屋で休息。五十鈴川の流れを前に、お伊勢名物「赤福」を舌づつむ。

御殿場荘へ帰る途中、伊勢の神楽焼を見学。六時、御殿場荘に着き、エキスカーシヨンを終えた。

(美里中学)

第十七回大会雑感

八木 庸 夫

五月九、一〇日に津で行なわれた今年次大会の集中テーマは「現段階における漁業協同組合の性格」であったが、性格を問題にした報告者は一人もなかったといつてよい。わずかに一般報告で松本巖氏が沿岸漁業の商品経済化をとりあげたが、それも漁獲量と水揚量を対比して現象的に整理したもので、漁村の性格鮮明としてはいささか不十分であった。

問題なのはシンポジウム報告者で、一樣に経済事業の発展方向に焦点をあてて報告を行なったが、これは漁協の性格の観点からすれば、部分的な政策問題にすぎないといえる。問題は実はその漁民―漁業―漁協全体の発展方向との関連のし方にあるはずである。漁民、漁業というその成立の根底との結びつきが忘れられていた点に、暴走の原因があったといつてよいであろう。

宮城雄太郎氏は明らかに漁協事業の全体を意識して報告したが、残念ながら整理が不十分であったように思う。これは氏を孤軍奮斗の状態にしている周囲の研究者の

問題で、現状ではこの問題を練るうにも話相手がいないのであろう。

漁協の性格の問題は、それが漁民、漁業にとって必要なのか、またただ役に立っているかという点にある。現在の漁協がもし役に立っていないければ、役立つように改革しなければならぬ。必要なければならぬとせねばならない。これは暴言であるが、いづれにしても零細漁家、中小漁業の発展の道はどこにあるのか、それを支えるために漁協はいかにあるべきかを忘れてしまえば、それはただの事業体、株式会社のなみのにすぎないということになる。そのような観点の報告が実に多かった。これでは、「漁業経済研究の性格」を問題にせざるをえなくなる。

これと関連して、一般報告で安保史人氏が、大資本の生産物が多い冷凍魚の消費の増大にともなう大都市中央卸売市場の変貌を問題にし、零細漁家および中小漁業の生産物が多い生鮮品の取扱量の減少には一顧も与えなかったのに対し、すぐ「問題点はどこにあるのか」と質問がとんだのは印象的であった。

大島襄二氏が地理学的観点から真珠養殖

業の地域性について報告したのに対し、浦城晋一氏が社会経済学的観点から地域性把握の方法について批判したのは、専門の異なる研究者相互の率直な意見交流として好感がもたれ、一服の清涼剤を得た感があった。

私的な話合いでの主要な話題は「公害および漁業補償」であったと思うが、これについて茂木六郎氏は「漁業補償の事後調査を共通研究テーマにとりあげては」と提案した。これは今後の問題として重要であると思う。

(長崎県水試研究員)

学会誌原稿申込み

会誌編集部

漁業経済研究第十八巻三号・四号の発行計画は次通りです。会員各位の研究成果をお寄せ頂きたく御願ひ致します。

原稿〆切 第三号 四五年 九月末日

第四号 “ 一二月末日

編集上の都合もございますので、投稿予定を事務局までお知らせ下さい。

㊦ 昭和44年度 会計報告

(1) 一般会計

収 入 の 部

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
会 費	950,000	735,700	
ボーナス・カンパ	—	76,000	
会誌売上	50,000	53,000	
寄附金	10,000	5,000	
広告料	—	6,400	
仮受金	20,000	—	
雑収入	16,579	16,579	
前期繰越金			
計	1,046,579	892,679	

支 出 の 部

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
会誌印刷費	450,000	154,140	17-2, 短信
通信発送費	70,000	32,760	
事務局費	120,000	70,550	
会議費	20,000	552	
大会経費	40,000	27,852	
負担金	20,000	24,968	
雑費	5,000	3,660	
未払金	314,430	314,430	16-4, 17-1
借入金	—	—	借入金返済
特別会計繰入	—	100,000	
次期繰越	7,149	163,767	
計	1,046,579	892,679	

昭和四十四年度会計および四十五年度予算について

昭和四十四年度会計報告および予算は別表の如くであるが、大学紛争の影響をまともにうけて悪化した昭和四十三年度予算を受け継ぎ、その克服を目ざして四十四年度は会費徴収に努力を払った。その結果、会

員各位の協力を得て会費収入は四十三年度の二倍余に達し、ボーナス・カンパと相まって四十四年度予算額の九〇%弱の収入をあげることができた。

支出では、第一に赤字の一掃に努め、過

年度分の会誌印刷未払金（東大出版会）、借入金を返済し、事務局費、会議費を節約し、かつまたとりくずしていた「特別会計（学会賞基金）への繰り入れを行なった。そのため学会誌の発行は原稿の集まりも悪かったこともあつて、大幅に遅れたが、これは今後回復に努めてゆく予定である。

四十五年度予算については、あくまで会費収入を軸として運営する方針で、昨年度に増して会員の協力を得なければ、またまた赤字に転ずる危険にさらされており、切に御協力を御願ひする次第である。

(Ⅱ) 昭和45年度 予算案

(1) 一般会計

収 入 の 部

科 目	前年度予算額	本年度予算額	備 考
会 費	950,000円	700,000円	2,000円×350人
会誌売上	} 50,000	20,000	
寄附金		30,000	
広告料	10,000	10,000	
雑収入	20,000	—	
前期繰越金	16,579	163,767	
計	1,046,579	923,767	

支 出 の 部

科 目	前年度予算額	本年度予算額	備 考
会誌印刷費	450,000円	600,000円	20万×3
通信発送費	70,000	100,000	
事務局費	120,000	100,000	
会議費	20,000	20,000	
大会経費	40,000	50,000	
負担金	20,000	15,000	
雑費	5,000	5,000	
未払金	} 314,430	—	
借入金			
特別会計繰入	—	—	
次期繰越	7,149	33,767	
計	1,046,579	923,767	

財 産 目 録

特 別 会 計	100,000
現 金	49,526
予 金	114,241

昭和45年5月10日

漁 業 経 済 学 会

北海道指導漁連の近況

芳 賀 英 昭

本道沿岸漁業の指導機関として指導漁連が発足して十年をむかえ、基幹事業として「営漁改善」「教育」「漁協経営指導」「漁政活動」を行ない、本道漁民の中にやっと定着した事業活動を実施するに至っている。現在、職員約四〇名、年間予算一億二千万円（殆んどが単協・連合会の賦課金による収入である）で運営されている。

発足以来中心的に進めてきた事業は、営漁改善であるが、「営漁」という言葉それ自体が、指導漁連が発明した新造語でありこのコトバを普及するだけでも何年も要したが、現在ではどこの浜でも営漁改善なるコトバは一人前で通用するまでになっている。

営漁改善の事業内容は、漁業の計画化つまり、漁協地区の漁業の総合計画とこれを土台として漁家の所得が最適条件で確保される漁業の組み合わせ（営漁類型）をつくり、漁業の近代化をはかろうとするものであり、当然生産技術指導から経営経済指導

に至るまでのあらゆる問題を含むが、漁協がその事業を通してこれらを実施するという観点から、経営経済指導を重点に実施している。漁家個々の実態調査にはじまり、地域の漁業診断を行なって、問題点を抽出し、漁民との話し合いの中で、漁業の将来像（五年程度）をつくり出すという作業過程であるが、現在拠点組合としてとりあげた一五組合において漁業診断書が作成され、組合の内部機関で検討中である。

この事業をすすめる場合のネックは、漁協は、経済事業を中心に運営され、ヒトとカネがかかり効果の容易に現われない指導事業には消極的であることであり、また、小規模漁協では、経営そのものの維持すら容易でなく指導事業の実施にまで手がまわらないことである。このため、漁協経営指導事業の面でも指導事業体制の確立中長期経営計画の樹立、合併促進が本年度の中心課題としてとりあげられている。

これらの漁業の振興対策とは別に、本道においても公害による漁場価値の低落が著しく、これら公害対策が指導漁連の大きな課題となっている。

また、漁協職員の待遇も低く、これらの

共済制度（医療・退職金等）等の樹立や待遇改善のための対策も当面する緊要な課題であるが、経営基盤が弱小な漁協においては、職員の確保すら容易ではなく、さきの漁民への奉仕（指導事業）体制あるいは職員的生活権擁護等の観点から、漁民の自主的・民主的活動を十分保持できる対策をたてながら、経営規模へ拡大（合併）をはかることが、漁民と漁協を守る上で、指導漁連が果さなければならない重点課題であろう。

（北海道指導漁連）

短信原稿の投稿

事務局

次回短信は九月末に発行の予定です。

多くの方の投稿をまっていますので是非近況をお知らせ下さい。

投稿〆切は九月十五日

枚数 四百字三枚